セイロン亭の謎

平岩弓枝

Yumie Hiraiwa

イロン亭の謎

平岩弓枝

Yumie

中央公論社

セイロン亭の謎

一九九四年 二 月二五日 初版印刷
一九九四年 三 月 七 日 初版発行

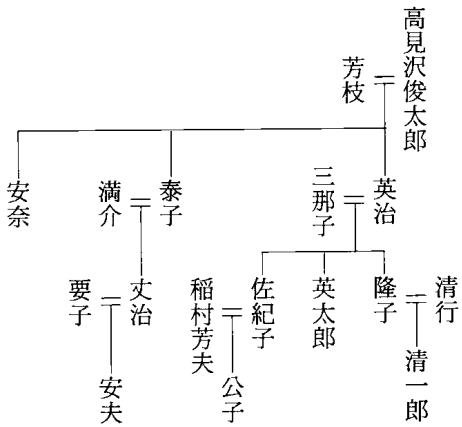
著 者 平岩弓枝
発行者 嶋中行雄
印刷所 大日本印刷
製本所 大日本印刷
発行所 中央公論社
〒104 東京都中央区京橋二-八-七
振替 東京二-三四

©1994 CHUOKORON-SHA, INC.
Printed in Japan

ISBN4-12-002299-4

セイロン亭の謎

高見沢家系図



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

A

新幹線の新神戸駅から、だらだらと坂を下りて行くと北野へまがる道へ出る。
矢部と森山は地図をみながら、その方向へ歩いていた。
矢部悠は、一応、肩書はキャスターということになっていた。二年ほど前に、たまたまゲストで出演したテレビのプロデューサーに気に入られて、一年ばかり、その局のワイド番組にキャスターとして起用された。
おかげで、かなり世間へ顔も売れたし、仕事も増えた。
が、当人は本来、書く仕事が好きで、気に入っているのは旅をして紀行文を発表することだが、それだけでは、いつまで経っても女房ももらえないぞといわれて、依頼されればなんでも書くことにしている。
キャスターをして以来、ルポの注文が増えた。今回の仕事も、まあ、その延長上と考えられる。
森山信司はカメラマンであった。彼とは相性がよくて、今までにも随分、コンビを組んだ。彼

との共通の趣味は旅、人がよくて仕事熱心という点でも気が合っている。
年齢は森山が二つ上だが、背は矢部のほうが高い。
「ここをずっと入って行くと、神戸名所、異人館ですよ。休みの日なんぞ、女の子がたむろしていて、とても歩けたものじゃないが……」
いいかけて森山が黙ったのは、ぞろぞろと、きゃあきゃあいいながら若い女がやって来るのをみたからで、道の両側は如何にも住宅を改造したといった感じのブティックやアクセサリイの店、ケーキ店、コロッケ屋、レストランなどが点々とある。
「十年前までは、ハイカラな住宅地だったんですがね」
学生時代、船の写真を撮りによく神戸へ来ていたという森山がいった。
彼の父親は銀行に勤めていて、京阪神を中心に転勤していたらしい。
矢部は立ち止って、片手の地図を眺めた。
ラインの館だの、風見鶏の館だの、萌黄の館だのと、人が集っている先のほうへ出て、道から、小高いあたりを見上げると、ずば抜けて立派な洋館が緑に囲まれている。
「あそこらしいな」
森山が地図をのぞき、その視線を洋館へ向けた。
「流石ですね」
観光名所になっている洋館とは、けた違いに豪壮な建物であった。
それを取り巻く樹木は樅が多かった。

道を少し入ったところに、石の門があった。
敷地は石垣をめぐらし、門扉はがっしりした鉄柵にはさまれている。
その前に立った二人が、少しばかり驚いたのは、門からなだらかな石段が築山に沿ってカーブしながら上のほうに続いていたからで、この家の門から玄関までは、ちょっとした神社や寺の参道ほどもありそうであった。
石の門に、はめ込んである「高見沢」という表札を確認してから、矢部はインターホンを押した。
「どなた様ですか」
と女の声が応じた。
矢部は、この取材を依頼した女性雑誌の名をいい、自分の姓名を告げた。
「どうぞ、お入り下さい」
二人の目の前の門扉が低い音をたてて開いた。矢部が先に、森山が続いて門内へ入る。
電動式の門扉は、まるでそれを見届けたかのように素早く閉った。
石段は、思った以上に長かった。
「雨の日は、どうするんだろうな」
歩きながら、矢部がいい、
「上のほうにもう一つ道があるんだろう。そっちは玄関まで車が横づけに出来ると思うよ」
と森山が応じた。

矢部は小型の旅行鞄一つだが、森山のほうは器材の入った重そうなショルダーとボストンバッグ。
「一つ、持とう」
「いや、大丈夫だ」
その声が聞えたのか、植込みのむこうから若い男が姿をみせた。
「悠さん、待ってたぞ」
「清さんか」
声が学生時代に戻った。
アイスホッケーの部員であった。
石段をかけ下りて来た高見沢清一郎も背が高い。しかし、体つきは矢部悠よりも華奢(きゃしゃ)にみえた。
「カメラマンの森山君だ」
矢部が片方だけの紹介をしたのは、森山には新幹線の中で、さんざん、高見沢清一郎のことを話したあげくだったからである。
「御苦労様です。さあ、どうぞ」
清一郎が、森山のバッグへ手を出したが、森山は、
「商売道具ですから」
と笑顔で辞退した。
「駅まで迎えに行くといったのに」

先に立って、清一郎がいった。
「車で来る道がちょっと厄介なんだ。地元のタクシーでも、ええっと驚くような道でね」
新神戸の駅からだと、かなり迂回することになる。
「カメラの器材のことを、うっかりしていたよ」
森山が下から苦笑した。
「なに、馴れてますから、それほど重くもないんです」
石段を上り切ったところに、イギリスの貴族の館かと思うような建物があった。
前庭は芝生で、花壇がある。
花壇は建物に沿って東側に続いていた。
玄関には中年の女が出迎えていた。
グレイのスカートにグレイのカーディガン、白のブラウスといった恰好からみて、お手伝いさんではないかと、矢部は思った。
「いらっしゃいませ」
という声を聞いて、さっきのインターホンは、この女性が応じたのだとわかった。
「いっぺん、部屋へ入ったほうがいいだろう。挨拶はそのあとで……」
玄関を入ったところの階段の下で、清一郎がふりむいた。
「本当にいいのか」
「勿論だよ。ゲストルームの支度も出来ている。家族の了解もとってあるし、遠慮なら全くいら

ない」
清一郎が階段を上り、矢部と森山が続いた。
この家は外国風な暮し方らしく、靴を脱がない。
古いが、掃除の行き届いた階段を上る靴音が、その時の矢部には、いささか気になった。
案内された部屋は洋室で、如何にもゲストルームといった感じであった。
ツインのベッドルームに、簡単なリビングルームがついている。
「トイレとバスルームは、廊下の反対側にある」
部屋の入口で、清一郎が教えた。
「二階はあと、俺の部屋だけだから……」
奥の突き当りであった。
その他はバスルームの隣が図書室と納戸になっている。
「一休みした時分に声をかけるよ。母を紹介するから……」
清一郎が下りて行き、矢部はコートを脱いだ。
先にブルゾンを脱いでいた森山が洋服箪笥を開けてハンガーの一つを矢部に渡す。
「一流ホテルのスイートルームって感じですね」
窓越しに神戸の海が見えた。
「時々、外国からの客を泊めるとは聞いていたんだがね」
階下は二階の倍くらいの広さがありそうである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「矢部さんの静岡の実家も広いじゃないですか」
そこへ泊まったことのある森山であった。
「ここには遠く及ばないよ」
静岡の旧家であった、典型的な日本建築で、すべてが畳の部屋ばかりである。
矢部自身は東京のワンルームマンションで暮している。
「どうも、こういう所へ泊まると、我が家へ帰った時が、がっかりですよ」
という森山は公団住宅住いであった。
森山がバッグからカメラを取り出している時に、若い女が紅茶を運んで来た。
マイセンの紅茶セットで、ポットにはキルトのカバーがかかっている。
「こりゃあ、うっかり割ったら大変だな」
マイセンの茶器が日本でいくらしているかを承知していた矢部が思わずいい、テーブルへ並べていた女が微笑した。
小柄だが均整のとれた体つきをしている。
紺のタートルネックのセーターに、紺のスカートで、白いエプロンをかけていた。
さっき玄関先で出迎えた女性と、どことなく似ている。
「失礼ですが、あなたは高見沢家の……」
矢部が訊き、エプロンの女は丁寧にお辞儀をした。
「私は……母がこちらのメイドをして居りますので……今日はお手伝いに……いつもは元町の店

のほうで働いて居ります」
勧められて紅茶に手を出した時、清一郎が上って来た。
「まあ、セイロン亭の名茶を一服、どうぞ」
空いている椅子に腰を下して、
「星ちゃん、僕のカップもあるやろ」
と関西なまりで訊いた。
「はい、御用意して居ります」
星ちゃんと呼ばれたエプロンの女が、お盆の上から、新しいカップを取って、ポットの紅茶を注ぐ。
「セイロン・ウバやね」
念を押してから、矢部のほうを向いた。
「セイロン島の東部のウバ州で採れるお茶でね、世界三大銘茶の一つなんだ。紅茶の玉露なんていう奴もいる」
取材ノートを出しかけた矢部を制した。
「資料は、あとから、いくらだってやるから、まず、色をみて……」
やや明るいオレンジ色であった。
「香は他の紅茶より、ずっと強い」
たしかに、湯気と共に芳香が豊かに立ちのぼって来る。

「味についての感想を訊きたいね」
かつてのアイスホッケーの仲間が、すっかり紅茶の専門家になっているのを、矢部はいささかの関心をこめて眺めた。
「いい意味での渋味があるね。たしかに日本の玉露と共通したマイルドな渋みと、甘みを感じるよ」
「流石日本茶の老舗(しにせ)の悴(せがれ)だな」
「旨いよ、これは砂糖もミルクも要らない」
「勿論、これはストレートで飲む紅茶だよ」
テーブルの上の砂糖壺に手をのばしかけていた森山が慌ててひっこめた。
「セイロン島か」
紅茶を味わいながら、矢部がいい、清一郎がその横顔へいった。
「悠さんがセイロンへ行ったのは、だいぶ前だろう」
「大学を卒業した年だったよ」
就職もしないで、母親のへそくりをくすねては外国旅行ばかりしていた。
「インド洋の涙なんてガイドブックに書いてあったから、さぞかし優雅な島だろうと思って行って、空港でぎょっとしたよ」
コロンボ国際空港といえば聞えはいいが、当時の空港ビルはバンコクやシンガポールの空港から比較すると、かなりお粗末であった。

到着が深夜だったにもかかわらず、むっとする熱気と独特の臭気が襲って来て息がつまりそうだった記憶がある。
「だが、いい旅だった」
金はなかったが、時間はあり余っていた頃だったから、セイロン島の殆んどを歩き廻った。
「茶畑はキャンディからヌワラエリヤへ行く途中で随分、見た」
「それじゃ、あとで、セイロン・ヌワラエリヤとセイロン・キャンディを味わってもらおう」
紅茶を飲み終った時、そういった清一郎が急に声をひそめた。
「但し、リビングではお茶を出さない。実は母が強度の不眠症でね。医者はお茶のせいでは全くないというんだが、当人が気にするので、飲み物はジュースかアルコールと決めているんだ」
紅茶を売り物にする家としては、皮肉なことであった。
高見沢家は代々、紅茶を輸入する会社であった。
清一郎の父の代に、その紅茶を飲ませるティーサロン、いわゆる喫茶店を元町に開き「セイロン亭」と名付けた。
それが成功して、今は大阪、京都、東京とチェーン店が増え続けている。
「それじゃ、下へ行こうか」
清一郎がうながして、男達は同時に腰を上げた。

B

矢部悠が依頼された女性雑誌は、来月、発行される号で、紅茶を特集することになっていた。その中で、最近、若い女性に人気のある「セイロン亭」のオーナー一家を紹介するのと、輸入紅茶についての解説の部分を、矢部が担当することになった。

それは、「セイロン亭」の女社長、高見沢隆子の一人息子、清一郎と矢部が昵懇だったためである。

もっとも、矢部が清一郎と、

「清さん」

「悠さん」

と呼び合う間柄だったのは大学時代のことで、卒業後は殆んど会う機会がなかった。

しかし、清一郎は矢部の遠慮がちな取材申し込みに、学生時代と変らない声で、すぐに承知してくれたばかりではなく、神戸での宿泊に、自分の家のゲストルームを提供してくれたものだ。

「友達っていいもんですね」

と森山が感心するくらい、清一郎は矢部の取材に協力的であった。

もっとも、これは「セイロン亭」にとって、まことによい宣伝にもなる。

高見沢家の広いリビングには、高見沢一族が勢揃いした。
といっても、この家は、高見沢隆子と清一郎、それに、隆子の妹の子だという稲村公子の三人で、他はこの撮影のために須磨からやって来た高見沢丈治、要子夫妻と、その息子の安夫であった。
「丈治小父さんは、うちの母の従弟(いとこ)、つまり、叔父さんの母さんと、母の父とが兄妹でね。紅茶の輸入業のほうは小父さんの会社がやっているんだ」
と清一郎は紹介した。
つまり、高見沢という姓は隆子の実家のもので、「セイロン亭」の先代、清一郎の父の清行は養子であることを、矢部は今度、はじめて知った。
清一郎の父の清行は五年程前に病死して、そのあとは、とりあえず、妻の隆子が社長に就任した。清一郎は目下、肩書は「セイロン亭」の専務取締役である。
高見沢一族の写真撮影が済み、矢部が「セイロン亭」の歴史について取材している中に陽が暮れた。
庭の樅の木には、見事なほどの電飾がほどこされている。
あと二週間ほどでクリスマスであった。
「では、七時から夕食にしますので、それまで、皆さん、一休みして下さい」
矢部の取材のきりのいいところで、清一郎がいい、矢部と森山はいったん二階へ戻った。
「社長の不眠症というのは、かなりひどいんですかね」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com